What I do, study, and think as an information professional

インフォプロってなんだ？
私の仕事，学び，そして考え第 24 回 真銅 解子
東レ株式会社 東京資料室情報管理 54(1), 040-041, doi: 10.1241/johokanri.54.40 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.54.40>)

働く喜びにあふれた仕事とは、価値観と目的にブレがなく、自分で考え自己の判断で実行することができることだとか。インフォプロであることはなんと幸せなことだろう。インフォプロの価値観と目的はとてもわかりやすい。「知識は力なり」に異を唱えるインフォプロはいないだろう。担う役割は人と情報をつなげること。人の「知りたい」と「知ったことを伝えたい」という欲求に奉仕するため、事実または記録に基づいた情報を科学的論理的思考によって取捨選択し、求める情報を求める人に時間空間を越えて届ける。そのために努力する。要はそういうこと。それには日常的にどれほど主体性と創造性が求められるものかは3日やってみればわかるというもの。結果として評価され見合う処遇を得ることができれば最高だが、困ったことにそれ抜きでも十分にはまると抜け出せない仕事なのだ。

こんな夢見るようなことを思いながら年月が過ぎ、1969年に図書館短大を卒業し東洋レーヨンの本店図書室に入って以来42年、東京資料室と名を変えた同じところではほぼ同じミッション——製造業の本社業務のための外部情報入手支援——を務めてきた東レでのインフォプロ生活も終わりが迫った。大きな顔をしている私だが、時代と所属企業に恵まれてぬくぬくと過ごしてきた運の良い人間であり、実際は不良社員、不良インフォプロだった。やったこと以上に、やらなかったこと遣り残したことが多く後ろめたい

思い出には事欠かない。今後のインフォプロにとって他山の石にでもなってくれたら少しは罪滅ぼしになるかもしれないと、この場を借りていくつかの悪行を白状する。

若い頃は根拠もなくどんなに気楽にやっても給料分以上は働いていると思えた、なめていた。気の向いた調べものはしばしば時間も経費も無視して気の済むまで行った。得られるものの可能性について熱意を持って勤めると乗ってくれる利用者が結構いたもので、そこにつけこんで新しく使えるようになったデータベースなどのツールは人の財布で経験を積んだ、遊んだ。

不足する体系的知識を基礎からきちんと身につけることをせず、あちこち出かけ首をつっこみ断片的知識をかき集めては守備範囲の広さが売りとうそぶいていた。

経営的視点を欠き戦略的思考をせず故意に全社的観点を無視して部分最適化に走った。全社展開するなんてまっぴらだと、知らない人との交渉が必要なのは避け、新規予算獲得の必要のない範囲でのみサービス提供を計画実行しては自己満足に浸っていた。こんな私に電子ジャーナルが手におえるわけもなく、東レにとって幸せなことに得がたい機関車役を果たす人材がいたのをいいことに何もしないで済ませた。易きに走り、衝突を避け、根がケチなので金額や作業量の桁が大きくなると手に余るため触ら

ぬよう逃げた。

一度もともに資料室の利用案内をしなかった。簡単な一枚ものの案内を作ったことはあるが改定もしないのですぐ使えなくなった。思いついて作った調べ方ガイドも同じ運命をたどった。書架のガイドはないに等しい。慣れない人にはおそらくどこに何があるか訳がわからない状態を、大した量ではないからとの言い訳のもとと放置した。

分類番号の不統一がちらほら散見され、登録せず書架に配架したものが恒久化している。カタログギンが面倒とばかり特殊コレクションとしているもの多種発生。整理整頓ができずにルールを恣意的に運用する管理といえない資料管理、今からでも少しは何とかしろよと自分でも思う。

会社の中で出会う情報要求の多くは、数十年単位でみればそれほどのバリエーションはない。顔の見える範囲へのサービスしかないから、長年やってきて、たいていの場合短い対話で相手の満足する回答を渡すことができるようになったのを良いことに、説明が面倒という理由から、経費処理・購入手配やコピー取りなどの手間全部を抱え込みファストサービス化した。その結果、多くの若い利用者の学ぶ機会を奪い、問題解決能力獲得を遅らせた。なに、学ぶ力のある人材はそんなことで阻害されたりしないから気にすることはない、底上げをしなかったにすぎないとの言い訳のもとに。

PRもさぼった。何度かチャンスはあった。働きかける方法はいくつもある。その気になれば千客万来も夢ではない。組織のなかで存在感を主張し上の方にも覚えめでたくするのが優等生というものだろう。が、しかし、そこまで粉骨碎身の働きをしたくはなかった。

自分をブラックボックス化した。仕事を抱え込んで放さない、人に説明しない、組織としての仕事の

仕方にまるで疎いまま知らぬふりをした。長らくワンパーソンライブラリのままにしておいて、後進育成させないほうが悪いと開き直り、しきりに言われる業務の見える化は鼻先で笑っていた。マニュアルは作る人間にとって大いに意義あることだが、作った端から無用のものになる、何回か作ったからもういいと、マニュアルを作っていないことで自分が困っていれば世話はない。

客を差別した。そのときの腹の虫の居所や、相手の感じが好みかどうか、どこ所属か、地位はどのレベルか、要求が気に入るものか、頼み方が賢いか、さまざまな理由で丁寧だったり粗雑だったり、態度だけでなく提供する品質が常に一定せず、サービス業の風上にもおけないあしらいをした。

降りかかる火の粉に対しては闘った、理想のためには闘わなかった、ガラスの天井のはるか手前であきらめた。

そんなインフォプロ会社員生活を振り返って思うことはただひとつ「楽しかった」。

白状だけで反省はないのかって？ ごもつとも。自分の能力と残された時間から東レではこの辺までと、すっかり卒業間際のうきうき気分である。そんな私に言われたくないだろうが、あとは新時代の申し子たちの活躍を楽しみにしている。勝手なことを言えば、私のように、逃げないで、手を抜かないで、恐れずに、なるべく後悔の種を残さないで。日本企業の内部も変わるし社会情報環境も変わる。インフォプロの目的遂行のための障壁は易しくなることも減ることもないが、価値観と目的さえブレなければ地道な努力がいつか花開く。

たとえ実がなくても楽しかった思い出は残る。それがインフォプロ。